

I-6

室町〜江戸時代初期の金瘡書、南

蛮流膏薬書、『春林軒膏方便覧』に

見られる軟膏の色

中村 輝子・遠藤 次郎

江戸時代の代表的な外科医、華岡青洲（春林軒）が常用した軟膏が『春林軒膏方便覧』に記述され、今日に伝わっている。本書には基本膏の十四方が記され、これらの中には大玄膏、大赤膏、青蛇膏、白雲膏、中黄膏など、色の名が付いたものが多い。基本膏ではないが、今日の漢方の軟膏のうちで最も著名な紫雲膏もこれに該当する。春林軒の基本膏は、中国唐代の戰略家、李靖の陣方にならって体系づけられたといわれ、青蛇、白雲、大赤、大玄、中黄はそれぞれ東、西、南、北、中央に配当されている。さらに、五つの膏薬の色は五行に配当されていることから、これらは、散（白・青）、収（青・白）、緩（黄）、堅（赤・黒）、奕（黒・赤）の作用も意識して

いたと推測される。また、紫雲膏の例でもわかるように、色は強い印象を与えるために軟膏の種類を判別しやすくする利点がある。

一方、青洲の時代から一〇〇年以上前に流布した南蛮流外科では、基本膏薬が五つあり、青膏、白膏、黄膏、赤膏、黒膏と、全てに色の名が見られる。華岡青洲の軟膏はカスペル流膏薬を原方とするものが多いことは一般に知られているが、南蛮流の影響については指摘されていない。南蛮流の色の膏薬と春林軒の色の膏薬を比較してみると、処方の中味は違っても、基本的な薬効は共通しているものが多い。例えば、「青（青蛇膏と青膏）」は腫物の排膿作用、「赤（大赤膏と赤膏）」は消炎、消腫作用、「白（白雲膏と白膏）」は収斂作用、「黒（大玄膏と黒膏）」は諸毒を解す作用、「黄（中黄膏と黄膏）」は諸瘡全般に対して愈す作用、として認められている。春林軒膏薬と南蛮膏薬の類似性は、膏薬の色の面だけでなく、基剤として、椰子油、ならびに、麒麟血・乳香・没薬などの樹脂を用いる点にも認められる。

日本において、色の名が付いた処方方は南蛮膏薬に始ま

つたわけではない。南蛮流外科が伝播する以前、すなわち、室町〜江戸時代初期にかけての日本の金瘡治療の諸本を検討すると、色の名前が付いた処方多数見受けられる。例を挙げると以下のようである。(青) 生青葉、山神青葉、二種の青葉。(赤) 赤葉、平家赤葉、今川氏真赤葉。(白) 白葉、白神散、三白散、日本の白葉、唐の白葉、高麗の白葉、生白葉、両白散、三種白葉、二種白葉、白朝散、太白散。(黒) 黒葉、黒神丸、十二種の黒葉。(黄) 黄葉、平家黄、黄精丸。(薄色) 薄色、源氏薄色。

以上に挙げた葉は、①主に散剤で膏葉ではない、②処方中に南蛮・紅毛外科の薬物を使っていない、③出典である各種の金瘡書は南蛮流外科の伝播以前のもので推定される、④中国の外科書中にも色の付いた処方は多くない、などの点から、日本の金瘡治療において独自に発展したものと推定される。

金瘡治療の諸本にみられる色の意義は春林軒や南蛮膏薬に比して雑多で、まとまりが見出しにくい。しかしながら、黒は瀉葉、白は愈し、青は消毒、赤は腫痛、など

というような薬効を、ある程度は類推することができるといえる。これらの傾向は南蛮膏薬や春林軒膏薬とも一部は類似している。

華岡青洲は土着的な治療薬もしばしば用い、その中には金瘡治療書に多い「源氏の薄色」などの処方もみられる。これらのことを加味すれば、青洲が軟膏の色に意義を持たせた背景には、南蛮膏薬の影響だけでなく、日本の室町から江戸時代にかけての金瘡治療の影響もあつたことを軽視することはできない。

華岡青洲は「親試実験」を行う点で古方派に属する。演者らは古方派の台頭の基盤に室町時代以降の金瘡治療の影響があつたと考えている。本報告もその一例と言える。

本研究は本学卒研究生、石川幸乃、大槻和恵さんの協力を得、科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系的調査・研究」(二四〇二三一〇四)の一環で行った。

(東京理科大学薬学部薬用植物・漢方研究室)